

ことから、ホームで開催されているイベントや活動はとても大切なことだと施設の方が教えてくださった。僕が毎月楽しみにしているホームからの便りには、そのさまざまな楽しいイベントの様子が掲載されている。そして今、コロナの規制が緩和され、ホームに行く祖母と直接会うことが出来るようになった。画面越しのときと比べると直接会えることはとてもうれしいのだが、いつも決まって辛くなる時がある。認知症の祖母は、僕と弟の顔を見ると毎回必ず同じことを言う。「もうすぐしたらここを出て、そしたらまたご飯いっぱい作るからね。」と。その言葉を聞く度に僕は胸が締め付けられるように苦しくなり涙が出るのを堪えている。祖母の優しい言葉と、僕の大好きだった祖母の作ったケチャップのかかった熱々のハンバーグの味が思い出されてくる。

「福祉」とは、「すべての人が幸せに生活するためのとりくみ」とある。ホームで過ごしている今の祖母の姿には笑顔が多い。きっと大好きだった祖父が亡くなってから一人で過ごしていた頃よりも、今の祖母は「幸せ」なんだと思う。そんな祖母の幸せには、家族だけではなく、さまざまな方達のサポートがあるからこそだと僕は思う。

祖母の異変を最初に伝えてくださった警察の方々。グループホームを紹介し、支えてくださった支援センターの方々。そして今現在、祖母の生活をサポートしてくださっているグループホームの方々。

福祉とは幸せ。そして幸せとは「優しさ」でもあると僕は思う。今の祖母の生活はたくさんの方々の優しさから生まれてきていると思う。その優しさに感謝の気持ちでいっぱいになる。そして僕も人を幸せに出来る人になりたいと思う。中学生の僕にも今出来ることはたくさんあるはずだ。学校生活の中にもあるだろうし、日常の中でも、例えば電車やバスで席を譲ることだってできる。毎日の生活の中で僕にできる優しさを行動に移していきたい。

一つでも幸せを増やしていけるように。

「敬う心」

一宮市立丹陽中学校 2年 杉山 舞音花さん



私は、以前から福祉活動に興味があり、夏休みにある福祉活動に応募しました。活動当日、私は少し緊張していましたが、施設の職員の人たちは、優しく出迎えてくださり、私に丁寧に介護についての説明などをしてくれました。

施設にいる人は、高齢者で、認知症を患っていたり、足が悪くて歩けなかったりする人など、さまざまな病気を患っている人が、この施設に通っているということを知ることができました。次にお話をされたことが、私の中でも印象に残りました。それは、

「認知症の方は、何回も同じことを言ったり、変なことを話し出したりすることがあります。でもそのときに『この話、二回目ですよ。』などと、おかしいところを指摘するようなことを言わないようにしてくださいね。」

というお話です。職員の方によると、

「間違いを指摘された認知症の人は、ショックを受けてしまうので、例えば同じ話や変な話をしていたとしても、それをしっかりと聞いてあげることが大切なんですよ。」

と、間違いを指摘することが正しい接し方とは限らず、心遣いが大切とのことでした。そのとき私の頭の中にハッとあることがよみがえりました。

私の亡くなったおじいちゃんのことを思い出したのです。私が小学四年生のある日、私のおじいちゃんはお風呂で倒れ、検査をすると、脳梗塞だとわか

りました。以来、おじいちゃんが変わってしまいました。それまでは、児童養護施設の先生をしていて、いつも頭の中は養護施設の子供たちのことを考えていました。算数も得意で、私にたくさんの問題集を作って教えてくれるなど、いつも太陽のように明るく元氣いっぱい、優しいおじいちゃんでした。でも、倒れてからというもの、足が動かなくなっていく、どんどん話すことがあやふやになっていき、ときには、自分の年齢を二十歳や九十歳など、本当の年齢と違うことを言い出すことがあって、私はその度に、「違うよ」と言い、本当の年齢を伝えていました。

でも、そのときのおじいちゃんは、何とも言えない表情をしていたのを覚えています。私の何気ない一言や、私の一方的な想いで、おじいちゃんを傷つけていたのではないかと、ハッと、そのことがよみがえったのです。

もう一度、自分の立場に置き換えて、職員さんが言った言葉を心の中で呼び起こしました。

「同じ話や変な話をしていたとしても、それをしっかりと聞くことが大切です。」

「おかしいところを指摘するようなことを言うてはいけませんよ。」

心の中で響くこの言葉。そうか私は、おじいちゃんの気持ちも考えず、相手の立場になつていなかったのだと、改めて気づかされたのでした。本当の年齢を言えば思い出してくれるだろう。おじいちゃんはいつか必ず元のように戻ってくれるだろうと。

でもそれは、ただ私の一方的な願望だったので。そのときのおじいちゃんの病気の状態から目を背けていて、本当の意味で認めていなかったのではないかと、認めることが怖かったのではないかと今になって思います。

相手の状態をしっかり受け入れて、そして相手に合わせていくこと。これこそが、相手を思い、相手を尊重する気持ちなんだと思ったのです。そんなおじいちゃん、小学五年生の夏に、天国に行きました。おじいちゃんにしてあげられなかったことや、あのとき、こんな言葉をかけてあげられていたら……と、そんなことを考えていたら、後悔の想いがぐつと込み上げてきました。

でも、この後悔する気持ちがあるからこそ、今回の福祉活動で出会った職員さんの言葉や、接し方を重く受け止めることができたように思います。

福祉活動や私のおじいちゃんとの経験をを通して思うことは、相手の状態を知ることの大切さと、そして一方的な想いではなく、相手の気持ちに寄り添う心の重要さです。

人はいつまでも健康ではいられません。会話も思うようにできなくなったり、体も思うように動かせなくなったり、私たちはいづれ、一人で生きていくことが困難になります。人は、人の支えの中で生きているということ、福祉活動を通して、改めて思い知らされました。私は今後、相手の気持ちに寄り添っているかどうか、相手を尊重しているかどうか、温かく人に手を差し伸べていける人になれるよう、向き合い続けていきたいと思っています。